鯨と海の科学館
クジラのすむ海―浅い海から深い海まで―

開催期間：2019年6月1日（土）～2019年8月7日（水）

海藻ハーバリウム

クジラの豆知識（クイズ）

国立博物館からの標本帰還式

加藤名誉教授講演会

【企画展の内容・目的】 ※事業全体を対象に「海の学び」の視点で簡潔に、箇条書きで。

■山田町は、湖面に例えられるほど波穏やかな山田・船越両湾、高さ 300m の断崖が直接太平洋に落ち込み、荒波がうねる船越海岸、太平洋の大海原と、三陸沿岸の特徴を網羅する「海」を擁している。そこに生息する生物たちも実に多様であり、三陸沿岸屈指といわれる。また、当館のシンボルである「クジラ」も、この海を住みかとしている。クジラを通じて、ふるさと山田の豊かな海とそこに住む生物のさまざまな姿、海に生きる人々の様子を紹介し、身近な海の素晴らしさを再認識し、守り伝えることの大切を実感できるよう、５つのテーマを設定して展示を行った。

■関連事業は、サブテーマの「浅い海から深い海まで」に沿った 5 つのイベントを開催した。

■身近であるがゆえにいつもそこにあって当然と考えていた海に、改めて目を向け、理解を深める機会を提供することができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

１．企画展示の内容

■開催期間：2019年6月1日（土）～2019年8月7日（水）

■開催場所：鯨と海の科学館　海中プロムナード　常設展示室　特別展示室

■入場者数：3,４９９人

鯨と海の科学館　外観

企画展会場

山田の海といえば、多くの方は青空の下、ぽっかり浮かぶオランダ島と波静かな山田湾を思い浮かべる。しかし、海が私たちに見せる表情は実に豊かである。「身近な海」である山田の海の様々な姿を、写真や収蔵資料を使って展示した。例えば「やませ」教科書にも記載されている三陸沿岸の特徴的な気候であるが、他地方から山田を訪れ遭遇した経験を持つ人は決して多くはない。濃霧が町を包み込む様子に、驚きの声があがっていた。

船越湾は、タブノキやオオスジアゲハなど、温暖な地域に生息する生物の北限域でもある。特にも船越大島は、太平洋上に位置し、三陸沿岸特有のダイナミックな景観を有しているが、その姿は船上からでないと臨むことができない。写真ではあるがその様子を紹介することができた。

また、三陸を代表する海の幸「アワビ」漁業従事者以外が実際に採捕している姿を見る機会はまずない。実は現在も昔からの伝統的な漁具を用い、荒海の中手作業で採取しているのである。その様子を写真と実際の道具や人形を用いた再現模型を組み合わせて展示した。海の恵みを享受するための、地道な努力があることを周知することができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

　ワカメやコンブを知らない方は少ないと思うが、ワカメやコンブが海中でどのような姿をしているのかを知っている方も少ないのではないだろうか。故吉崎誠東邦大学名誉教授が作製し当館に寄贈されたワカメやコンブの、約２mの大きさの大型押し葉標本を展示した。一般的にはチリチリの塩蔵ワカメが、こんなに大きかったとは知らなかったという来館者が多かった。吉崎名誉教授は山田町を海藻研究のフィールドとして高く評価し、約８万点の海藻標本を当館へ寄贈された。７万点が東日本大震災で流失したが、がれきの中から見つけ出した大型標本の保護シートの上には、吉崎名誉教授の山田町民への熱い思いが書かれた紙が貼ってある。今回は吉崎名誉教授の功績とメッセージを紹介するため、保護シートに包まれた状態の標本も展示した。

　また、鈴木雅大氏が 2013 年に山田湾で発見した新種の海藻「ナンブワツナギソウ」を紹介した。山田の海は海藻の宝庫でもあることを紹介することができた。

当館は世界最大級のマッコウクジラ骨格標本を常設展示しているが、今回新たにその生態を楽しく学ぶためのクイズコーナーをリニューアルし、幅広い世代がクジラについて学ぶことができるよう工夫した。
日本鯨類研究所の協力により、クジラの仲間たちの海の中での様子を写真パネルで紹介することができた。イルカやシャチがクジラの一種であることを初めて知ったという感想を聞くことができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

収蔵資料の安定化処理の様子

館の被災状況写真

当館は東日本大震災で被災した。特別展示室では、被災直後から再開館までの６年半の道のりを、映像や写真、被災したままの資料、文化財レスキューによって元の姿に戻った資料を使い展示した。

また、復興に際し特にも大きな力を寄せてくださった東京海洋大学加藤秀弘名誉教授、国立科学博物館北山太樹主幹、岩手県立博物館鈴木まほろ専門学芸員の事績を紹介した。

全国から届いた支援に対する感謝の気持ちと、私たちはふるさとの山田の海とともにこれからも生きていくという決意を込めて、企画展期間中の４つのイベントは、全てこのコーナーの中で行った。

【来館者の声】

◯私たちと海が関係が深いことを感じた。

◯豊かな海を守り、後世につなげるための活動の重要性を感じた。

◯三陸の海の素晴しさを感じることができた。

◯海の体験講座に参加したかったが、仕事の関係で申し込みができなかったので、次回はぜひ参加したい。

◯海は身近なもので優しいイメージだったが、時には怖い存在にもなることを再認識した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

2．関連事業の内容

■やまだの海藻ハーバリウムで館内を飾ろう

【開催日時】2019 年 5 月 26 日（日）10：30 ～ 12：00
【開催場所】鯨と海の科学館　研修室
【参加者数】13 人
【実施内容・目的】

- ●深い内湾を持ち、かつ太平洋に面する山田町は、三陸屈指の海藻の宝庫でもある。普段の食生活にも登場するが、海の中での様子は知られていない。
- ●海藻の種類や生態を学ぶとともに、100%山田町産の海藻を用いて、大きな水槽にハーバリウムを作製する。
- ●完成した作品は、企画展の「海藻の宝庫山田の海」で展示する。

会場の様子

山田の海藻

講師による海藻の話

製作方法の解説

本イベントは、企画展のプレイベントとして実施した。「海藻ハーバリウム」づくりは、当館の新しい体験プログラムとして昨年度から実施している。これまでは小瓶を容器としていたが、今回は「海藻のある海」の再現に取り組むべく、水槽を使用して製作した。ハーバリウムの利点は、オイルの中に立体的に海藻を配置するため、まるで海中を切り取ったかのような海の様子を再現できることであり、この特性を生かすことができた。

海藻の種類を学びながら製作

山田の海をイメージしながら製作

始めに講師から山田の海藻の種類と特徴についてお話を聞いてから、２つのグループに分かれてハーバリウムの製作を行った。
特に子どもたちは、身近な海に 200 種類以上の海藻が生息していることを知り素直に驚いていた。
湾内に生息している海藻の様子を再現できるよう、それぞれが工夫を行った。

立体的に成形

完成したハーバリウム

完成した作品は企画展内において展示し、アクアリウムとはまた異なった幼少で、「目で見て楽しむ」展示となった。

【来館者の声】

◯海藻の種類の多さに圧倒された。

◯海藻が育つ海の環境を守ることで、魚や貝の育つ環境ができることを学んだ。

◯海藻にも様々な種類、棲み分けがあることに驚いた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■「見てみよう！ふれてみよう！海の生きもの」

【開催日時】2019年６月30日（日）10：30～12：00
８月３日（土）

【開催場所】鯨と海の科学館１階タッチプール　しもかわ公園（船越湾内）

【参加者数】11人

【実施内容・目的】

●生きものを自分で探し出して観察することで、海をフィールドとして調査研究することの楽しさを実感し、博物館や海洋研究への興味関心を醸成する。

●東日本大震災以降、海へ行く機会が少なくなったり、海やふるさとへの抵抗感を持つ子どもたちがいる。海の生きものたちの力強い生命力を五感で感じることで、郷土愛と自己肯定感が生まれる。

専門員による観察方法の指導

観察対象を選ぶ

観察シートに記入

将来は海洋学者になりたい

参加者は少なかったが、子供たちは皆海洋生物への興味関心が高く、自分が選んだ生きものを熱心に観察し、カードを作成していた。

触ることを怖がらず、しかし小さい生きものへ優しさをもって接することができた。

タッチプールを使用しての観察会は初めての試みであったが、座ってゆっくり観察したり、調べることができ、年少の参加者に好評であった。図書コーナーの図鑑を片手にヤドカリとカニの違いを説明してくれた小学生は、そのほかの付帯事業にも参加してくれた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

会場のしもかわ公園

指導員からウニの生態を学ぶ

磯の生物を観察する

たくさんの種類の生きものに驚き

実際に海に行っての観察会は、生きものの特徴の観察はもちろんのこと、最干潮時から少しずつ潮位が上がる中で、海がどのように変化し、生きものたちがどのように対応していくのか知ることができた。

当初は海で採取、観察した生きものを館内のタッチプールに放す予定であったが、参加した小学生から「元の海に帰してあげたい」との意見が出され、そのように対応した。共生の心の萌芽を目の当たりにすることができた。

【来館者の声】

◯子どもは鯨館が大好きで、将来は海洋学者になりたいと話している。熱心に観察する姿に驚いた。

◯海のことをたくさん勉強して、将来は鯨館で働きたい。

◯子どもの付き添いのつもりで参加したが、自分自身が楽しかった。山田の自然に触れさせることができて良かった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

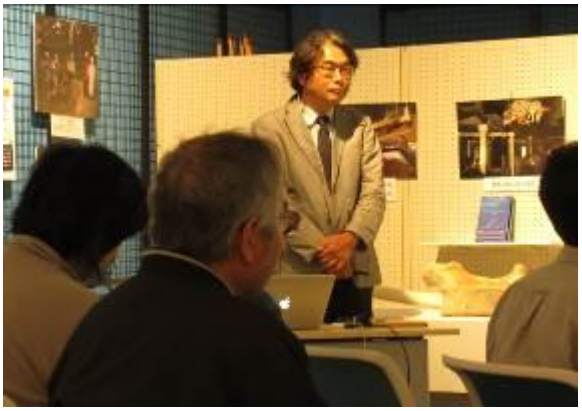
■特別講演会「3.11 で認識された標本レスキューの意義ー海藻標本の事例からー」

【開催日時】2019 年6月 15 日（土）13：30 ～ 15：30
【開催場所】鯨と海の科学館　特別展示室
【参加者数】33 人
【実施内容・目的】
●講師に国立科学博物館北山太樹研究主幹を迎え、三陸地方はなぜ海藻が豊かなのか、海藻は海の環境を維持するためにどのような役割を果たしているのか学ぶ。
●東日本大震災で被災した当館所蔵海藻標本の救出から修復、帰還までのみちのりをふり返り、標本の必要性を再認識する。

会場となった特別展示室

北山研究主幹による標本レスキューの展示

修復された海藻押し葉標本


講師の北山研究主幹

北山研究主幹からは、海藻と博物館資料レスキューの２つのテーマで講演いただいた。
三陸地方の海は、太平洋の早い潮流と背後の雄々しい北上高地の山々から流れ出る清流によって海藻を育む好環境をつくり、またその海藻が名産のアワビやウニを育てる環境をつくるという素晴らしい連鎖機能を有していること、しかし近年温暖化等により、海藻が育ちにくい環境に変わって来つつあることを熱心にお話しくださった。

講演の様子

盛況だった質疑コーナー

共に海藻標本レスキューを手がけた岩手県立博物館鈴木まほろ氏を紹介

国立科学博物館で修復を終えた当館所蔵海藻標本の帰館式

当館所蔵の海藻標本は、東日本大震災によって約８万点以上あったうち約７万点が流出した。北山研究主幹は岩手県立博物館とともに早い段階から救出活動を開始、その結果約１万６千点の資料が現存している。

学術資料はその価値に優劣はなく、研究進展のために必要なものである。今回の取り組みを通じて、資料を守り伝えることの大切さを再認識することができた。

また、講演会終了後、国立科学博物館による修復を終えた海藻標本 650 点の帰館式を開催した。

【来館者の声】

○標本製作の難しさと大切さを知ることができた。

○きれいな海を守っていかなければならない。

○山田に住んでいるが、見たことがなかった海藻が多く感動した。

■講演会「クジラ・地球が生んだ一番大きな動物ー鯨と海の科学館が目指した大きなクジラの世界ー」

【開催日時】2019 年7月 15 日（月）13：30 ～ 15：30
【開催場所】鯨と海の科学館　特別展示室
【参加者数】45 人
【実施内容・目的】
●当館の監修者である加藤秀弘東京海洋大学名誉教授を講師した講演会を開催した。
●クジラは魚ではなく我々の仲間哺乳類であること、当館のシンボルであるマッコウクジラは、三陸の海も住みかとしていること、クジラが住む海を守ることの大切さをテーマとした。

会場となった特別展示室

講師の加藤秀弘名誉教授

分かりやすい解説

一生懸命聞く子供たち

加藤名誉教授は、パワーポイントやクジラとダイオウイカの模型を使って、クジラの生態を参加した子どもたちにも分かりやすく説明された。

参加者は当館のシンボルであるマッコウクジラ骨格標本の製作監督者である加藤名誉教授の山田町とクジラへの熱い思いを熱心に拝聴していた。

加藤名誉教授による解説会

マッコウクジラやミンククジラの骨格標本を使った解説会は、講演会参加者が全員参加しての開催となった。

子どもたちの多くが魚類だと思っていたクジラが、私たちの仲間であることを、骨を指しながら丁寧にしてくださり、皆素直に感動していた。

世界最大級のマッコウクジラが三陸の海で捕獲された驚き、山田の子供たちと一緒に標本を製作した苦労話、震災を乗り越えた標本を見た時の感動など、加藤名誉教授の当館と山田町への愛情にあふれるお話を聞くことができた。

当館のテーマである「クジラを通じて三陸の豊かな海とそれを育む自然環境に学ぶ」に即した内容の講演となった。

【来館者の声】

◯鯨と山田町との.関わりがよく理解できた。

◯海を汚さない活動が必要だと学んだ。

◯鯨の本物の骨を見ること、触ることができてよかった。

■「チームくじら号のおはなし会ーあさい海からふかい海までー」

【開催日時】2019年8月4日（日）
1回目 13：30 ～ 15：30　2回目
【開催場所】鯨と海の科学館　特別展示室
【参加者数】32人
【実施内容・目的】
●深海研究者とその仲間たちが、歌と絵本の読み聞かせで不思議な深海の世界を紹介する。
●近年問題となっている「海のごみ」について、ごみが海に与える影響や、私たちが気を付けるべきことについて学び、海洋環境を維持することの大切さを再認識する。

会場となった特別展示室

チームくじら号の皆さん

おはなし会の様子

皆で楽しく深海手遊び歌

チームくじら号による展示

会場には、チームくじら号からお借りし深海生物のかわいい絵や深海の水圧で潰れたプラスチック容器など、深海に関するものを展示した。参加者はおはなし会が始まる前から手に取ってみたり、出演者の先生方に質問したりと、興味関心の高さがうかがえた。

「しんかいの手遊び歌」は、子どもから大人まで一緒に歌い踊り、楽しく深海生物の特徴を知ることができた。

しんかい6500で見た世界のお話の中で、海にはまだまだ解明されていないことがたくさんあり、調査研究が必要であること、おはなし会に参加してくれた子どもたちの中から、海洋学者が生まれてほしいことを語ってくださった。参加者は、海を調べ学ぶことの大切さを理解してくれたようだった。

海のゴミに関する資料を展示した。山田の海も徐々に増加しているという。自分たちが気をつければ、海の環境を改善できることを訴えるイベントとなった。

【来館者の声】

◯深海の様子が興味深かった。

◯もう少し魚が聞きたかった。

◯プラスチックゴミが環境・生態系に与えられるダメージや、海洋汚染の深刻さを改めて知ることができた。

【事業全体のまとめ】※簡潔に記入。

本企画展によって、毎日何気なく見ている身近な海は、実に豊かな表情をしていること、私たちに対し多くの恵みを与えてくれる存在であることを理解いただき、海への興味関心を高めていたけたと考える。海の学びミュージアム事業を導入したことにより、平成４年度の開館以来初めて、館全体を利用した企画展を開催することができた。特に、地元山田の海に関する資料を収集し、展示することができた点が、改めて町内・外どちらの来館者にも海について学んでいただくことのできる企画展内容となった。

関連事業では「海藻」「クジラ」「深海と海の環境」といった三陸ならではの題材をテーマに様々なイベントを実施したことで、幅広い世代が来館してくださり、地域の海について親しみ学ぶ機会となった。また、講師の方をはじめ様々な方の協力を得て、山田町における海からの恵みや三陸の海の賑わいをはじめ、広く海洋環境についても学ぶ機会となり、地域の海の豊かさはもちろんのこと、地球規模での温暖化や海洋汚染によって危機に瀕していること、その原因が我々にもあることを考えていただく契機となった。

今回の企画展で活用した資料は今後も地域の海を伝え・引き継ぐ資料として活用していく。

３．主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
１．日本鯨類研究所	鯨の写真の提供、ワークシートの提供
２．ＮＰＯ法人チームくじら号	写真の提供
３．加藤秀弘氏	鯨の写真の提供
４．国立科学博物館	「コンブ標本」貸出　　職員派遣
５．	

※主に教育機関や地域団体、他館などを中心に記載。表が不足する場合等は適宜増減すること

４．主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
１．広報やまだ	5月15日　7月1日　8月1日
２．岩手日報	6月7日　7月18日
３．	
４．	
５．	

※TV・新聞・雑誌等、主なものを中心に記載。表が不足する場合等は適宜増減すること

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。